



julie 30/7/927

うい世一うつるた生藝あり氣藝を藝て藝  
 ものつぬのがるへ術うそ品術うそ品術はかう  
 の人の。樂、作の象ぬしがにぬ。高  
 が安何しそ品惱の。あはは。高い處  
 の求心故みのとみ持け。生命が明さ  
 一めのふで興ふはつけ。命があるが  
 つつ壇うあふつよ深  
 (亮)地樂うるてりいああ  
 ああざしの處現勝深  
 民るるあみばははぐ  
 (民)か良りはか一れれ人

私心私語

相心  
角笛

木曜日

雨の通りを聞きながらストーブを前にして居ります。と長い冬の間の爐邊の童謡が蘇ります。幼い日の心を捉へた神話と敵異の世界から目を瞠つて憶えた夢の國が!!

畏敬の念を以つて眺めた幻想の國に生きる小供達はほんとうは幸福であります。

現実への夢を破られたものは、神体の恐怖に目醒めたものは甘美の悦楽を失つて不斷の苦悶を抱かなければなりません。

金曜日

問題に煩される度々暗い自己否定に追込まれます。それは自ら自己の力を断つに等しいものがあります。それが恩ふ私は私自信の要求の力に備えて居ります。今日の私の生活は自分の本然の感情から感激する熱があまりません。眞の勇者は瞬間に斯の情熱を完全に擺みながら生きて行こうが意氣地なく自らミッションした私は咳うながら生活の向上を阻害する自己否定の中に悲しみの影を残して行きます。

日曜日

小春日和やうに陽光を浴びながら友の明の話に聞

き取れて居ります。生活の中に常に常に濃厚な感覚

的不刺戟戦を進みて止まない若くて元気な友にさうでは官能の享樂、それが唯一の人生の收穫があります。いたずら官能の刺戟に醉ふて美しい夢幻の世界に没頭しやうとして居ります。

情を羨しく思ひますが、その様な快觀の夢から私は直い冷酷な現実の粗鄙な風を送られて怖いで震えります。斯の人運とともに青春の勃く日の夢さります。知るが如くが取て若んで現在の快樂から解脱してうとは努力せん。若い血浪打喜悅の中に葉川の心事のみ遺承するのをせう。

土曜日

夕食の終ったH-I-T君とストーブを囲みながら私は私の話を耳を傾けて居ります。玉の愛とは何かと尋ねた工さんの質問にSさんが答へて居ります。永久に忘れない慰めの言葉で、人の子の最も美しい愛は親の心膚でせう。心の周囲に體漫漫と作つて居る人がもんの奥にそれが冬の間の土中の種子のように潛んで居ります。そして一度僕、人間生活に対して意識が目醒めば體漫の殻が勿々に剥れ寂莫と哀傷とか湧き溢れるでせう。其の時、唯一の慰め、それが親の愛です。それは常に小兒の称ふれ、感情を以て生きて行く人にのみ思ひされるものでせう。人間の強大な力の表現の中にも人間の力の小鳥のやうに微弱ですが認め小鳩のやうに親鸞は身を抱て不安の心を抱いてゐるのです。主の愛の翼翼に無限と絶対の力がありまじます。

(2)



×冬小品

くわ

笑つた

— 尾体きとりまこと異様ち笑ひ —

笑つた  
笑つた

空は、  
冬だ、  
街と、  
冬だ

退屈した

憂々々々  
顔、

硬い風が  
窓ガラスを叩く

×病乱した笑ひ

てつ殊

— 尾体カぐるりで病乱した笑ひ —

出で来ハ！

誰れだ！  
死だ！  
死だ！

四ツの歌

三太郎

アーリオ

(3)

○昨日まで美はしがりし恋ふれど何故かみにくし醉ざめに似て。  
○恋とひ愛ととなえもその間にやゝがれ来ぬ女みにくし。  
○さくまことに恋しらりける君うれじと疲れと見ればたゞの女すがと。  
○恋とひ歌とともえしわが言の哀れはぢかし恋ふき事は。

笑つた  
笑つた

## 小旅秋行

### 七子

二

かねて自説書でおたのこ起稿もあり未だ金然恢復しゆうが、缺の  
療養の必要を感せられて今暫くきのヨーロッパの間で然び暮したと  
考へてゐた。彼は窮屈を告げた其費用の工面の為に其日是非佐山を訪  
ねて置かねばからなかつた。料理店兼旅館の主人として金と時間に  
多くの余裕を持つ佐山は剛毅と性秉の俠気による世話を好きとて土地の  
邦人間に名うてゐた。そして交際の廣い間へ対して自分の無  
學を嘆はれまゝとする意氣地から何々学校出身などとははれるも肩  
書き持つ書生よりの若い者達を寄寓させては何や斯と外の  
際の取巻にさせろ。稚氣な道樂を持つ男だつた。

佐山が再渡航の船に偶然に同乗して毎日表紙物に耽読し  
てゐた美しい妻君と知合にあつたことは甚大に對て勿怪の幸ひと  
言はねば、さうもかつた。虚弱で病床立つた勤めに堪えられぬ、  
彼が此国での二年に余る生活は大抵の場合彼を、真美の弟に之  
増して慈しむかと思はれる其妻君の庇護の下に絶えず佐山  
の物質的援助を受け過したのであつた。病院生活以来余り  
にと重かる金の無心ふの慣習切つたようす、彼の心にも少くぬ良  
心の苦責があつた。

困るときはあくまでその口  
訴う吉つて難作もくと付て呂れる其妻君の母意に輝く顔が  
現じて彼の心の灰しさを押退けては異狀のものとなりたる  
かど承人ありそうち自分の佐山夫妻がく愛する義の負担  
を感傷的、感謝の氣持のめぐれて少くね心苦しき沙

々と感じるのだった。

中央市場の角で電車を乗捨た彼は伊太利人支那人日本人  
などの雅多なアルゼンの丘並んだ通りの人波を抜けてサムナ  
オ街を下って歩いた。

「中野さん」

と旭亭と記された赤い看板のある家から出で来た若女が早足に近  
づきながら彼に向掛けた。女は佐山の料亭に抱えられた看護者だ  
った。恐ろしく酒の強烈な氣で酔つ拂つたう誰彼の見界ひく急所を  
突いてござ下す。厚法財が妙に芳火の氣に入つて極民地、備調の逸  
遊と作つて喫はせなり彼女は纏綿のヨシヅヤを纏つて本地の新聞ぐ  
る傳してやつたソしたことをある間柄だった。

「おやつ、あんだ、お説がよいか」

とは活潑なこと、私は偽物だぞありますま」と

中野さんと前断髪などしてあるから見違えたくつた、それか

エプロン姿は何だ、止せ止せまるで何處かの女ボーケーそつくりだ

「ハア、中野さん、是どたた今佐山さんに貰められたばかりよ、十  
七歳く見えろう」

「ぢや出来たのほやくか、たがあんまり有難くう、よ、免角根

底のふ、辯に新うこがり屋の仲間入りは

ハケ敷く理屈っぽく出たの本、打明けた話が是も興味のある

かうよ、人正藝者は断髪ごくつちや幅が利かふんとあそ

余りかかうと奥様にお眼玉よ

「奥さんは貴方がうんと言はかさやうな、の、であつてそしと賣

君との房々した髪き指氣もろく切つたが、知れら」と思つた。

「何が、奥さんも断髪にレウダたのが、」

脚足の廻りき氣にしてしきりに手を遣つてみた女はにたりと笑つて

意味ありげに頭を見てき細めた。

奥さんは貴方がうんと言はかさやうな、の、であつてそしと賣

君との房々した髪き指氣もろく切つたが、知れら」と思つた。

「おやの房々した髪き指氣もろく切つたが、知れら」と思つた。

「おやの房々した髪き指氣もろく切つたが、知れら」と思つた。

様つたく、感じた彼は思はず苦笑を洟すと注意深く四邊を見廻した。そして相手の女をきめつけよう。

『下うふ、あ喋りきあるんぢやふ』

そう言つたが、れな相手を見ると何とか言はねばらうかつた。

『金(きん)の用事(ゆうじ)ぢやふのか』

『ちよ』と其處迄も使ひに頼まれたの直ぐ戻るわ。

女はそれをしほに踵き返すと、そくとしたこない。寺院の鐘

き亦ふて街角を曲つて消えて行つた。見送るところなしに見送つてゐた彼は三度会つたことのある彼女の晴天の脂下つた姿を思ひ浮べると彼女が口癖の可愛い奴よと吉葉が聯想され、何が

もしの微笑が唇に湧いた。

而彼女も本気で苦労しこるのだらう。

と考へろと、ぐぐくに酔つた彼女の笑顔をしぶりと幸福を胸むかへ根強さから里れきに違ひあつと思つた。

『それでも彼女にはそれだけの勇氣があら』

彼は身につまされたよう独り言つた。

× × × ×

今夜大人数の宴会があらがいと佐山は肥た躰に白上衣を引掛けて

忙し調理場で極高く横重ねてある錐結類の品別けをした。

『どうか、二大そにちつたま』

おのを笑みちらりと見く微笑むと斯ふた僅佐山は仕事の手を休めか

かった。そして立衛(たてえ)てゐる見慣れか、雇人の手前を兼てござくしてゐる彼に矢矧速に語しかけた。

此間がうち来るの來るひと待つたんだよ、おのの女はおも前の看護

でもいた、うぐやあがんて心配してんだよ、お供が、ああるまじくと僕

りと寄越すものだ、心配させねばかりが能ぐああるまじく。

『…………』

彼は吾知らず娘の春うものを感じた。世話を焼ける厄介者に過ぎない。

自分に腹やが、身を離れて歸るが兵水の此人の恐しみの吉葉を今

更のように赤裸々に聞こはざと咽喉に支える感激に喜ぶべき吉葉

き知らなかつた。彼はつゞきのように緊張した沈黙の中に頬を膨らませてゐる佐山

の言葉に對峙した。

『それがあそます』

居間はソロコソ近く椅子を置いて妻君と二人きりで対合ふと彼は急に種

の穏やかせえた。ようか気持ちに暖かれた。対ひ合つた女は彼には姉と呼

ばれらほどの年一嵩(さか)ではあったが並勝れで美し姿の持主であつた。

彼自身の黒味勝り瞳孔の上を描いたようか鮮やかな眉を含めて

流れである。その眼が、つこ何か知り物をふると彼は見て取つた。熱々

自鳴氷氣を却けて佐山に世話を愛んでゐる三の若人の中、こ番強く

此妻君の心を掴むぐる者は彼自身であるとおもは消えまい。

ものがあつた。

『この節はひどい見限りねえ、ヨークへ行つたりうんともちんとも

言つて奇跡(きせき)だもの、まるで銀鏡(ぎんきょう)を外さる風に彼

妻君は笑つた聲。それとも恐がましに口調を外さる風に彼

を見た。彼は眼眩しさうに慌てて視線をはずした。

『済みません、山の中が素敵(すがく)に気に入つた所が僕が例の癖が

出たのぢや、詰らふもの、もの、纏つたとき書き下してゐるので

気が散るとき恐れず手紙など書く氣にならなかつたの、どう

言つた後で、直ぐ彼は不味の蟲(ちゆう)だと感付いた。耳放つて女に

お子との交通のことなどうせ知れな、ではぬま、然し知れなつて構はない、あれは彼女が未だものへ返事の重複(じゆふ)がうと

お止しなさよつまう。外國まで来そんか、お金にこうなつて頭

脳を痛めと何にあらの、それぞ創作あるつことは尊いことは違

ひなければ、お一食(いつくし)べることから安定を得てそれから出發するのだが

くちづけ

(5)

(前頁落葉狩のつづき)

「おまかせ……貰ふことをあつて貰う方に要る所と困るのであるが、草先の仕事  
がお好きで、たゞ草先で生活出来る就職があるのですから今少し元気を出  
しておなります。佐山此間から貴様のお出でを待つておられんのよ」

「何より、お三日坊主を嫌め込むおよろぶ贋物かのござる」

「貴様はそれだから駄目を私何處遣らうかの未だとの、あなたに出来  
ることを挙げるのは、ありますまい。私よく知るけれど先日メメ湯会の  
奇藤さんが見えど老いの浦川さんアンドス新聞のちへ被り、お詫び  
たのそれが圭草の口ひりで浦川さんは二足き踏むし結局貴様が全  
快きあつてから走廻みあるようにならしめ相談が走らんじのござる」

彼はそれを聞くと思は、ちが笑した、そして

「僕は食さず新聞記者さんを絞るが仕事は古  
ときっぽり言ひ切つた。娘と一種の反抗の問きが妻君の瞳きがあめて  
過ぎた。やがてそれが平常の辯けさに退ると黒耀石のようか、闇ヶに濡  
れはじめたのを見ると彼は何だか悲しくなつた。そしておひ過ぎたこと記  
びるもの、よう」

「あの新聞の圭草、ふく澤山の敵を持つは幸は速て僕には脊骨ひ  
切れません」

斯う言つて悄然として妻君の波打つた髪、髪のよく似合つてゐる額の辺  
りを見上げた。妻君は引緊つた顔を急に和げて心持大きき其の元に笑  
ひひ漂はせた。  
(つづく)

余白埋めに詩える、

植民地の冬

堀民浪史

「大根は入りますんか」と

まだ春は遠い。

寒そうに  
同胞の来也

植民地の冬

そうですね

ススキ燒きしませうか

孤身者

冬の生活

ホサゲでも

えーとせうか

そーですね

さすが人の冬の下ぐれ

どうも見つかぬ

職のうん友が来る

天共無吉

せ、冬、植民地の冬



九念

(一幕)

病人——(微に) ウ、  
(マリアは下平の部屋に駆け込み)

マリア——ハーフては……どうしたつす。  
アリスの叔父さんは上平ふか医者議だつて  
さうだわ。ミースミス。

よ。少し怖い様な先生だつたけれど、アル  
アリスの叔父さんは上平ふか医者議だつて  
さうだわ。ミースミス。

時——一千九百一年冬の夜

場所——東園南部の老田舎

病人——ア、(一と駆け出た力が声を)

アリス——ハーフては……どうしたつす。

アリス——ハーフては……どうしたつす。

アリス——ハーフては……どうしたつす。

登場人物  
盲目の病人——四十七八才  
その娘マリア——五十六才  
医者——四十ニ歳

老婆——六十才位

舞台はみすぼらい荒木造りの獨立

小屋の内部。舞台を中心より二

丈ばかり、上手に人口があり、下平の卓

子と二脚の粗末な椅子がある。下平の卓

部屋には、盲目の病人が寝てある。鍵

鉄製の舞台と椅子が一脚。そこで

机との間に薦枕と、灯の消えた蠟燭

がある。硝子窓を邊り、外は

暗黒。物音、风の音が聞える。

(一幕上る——)

(主色のライトで薄暗く照らされ

た舞台は、风の音の他、しばらく静寂。

やがて舞台の上から微かに恐るが御苦

病人——ウニ——(静寂)

(上色のメロカラ根カラボロの肩掛り

をも寒むるに登場——)

マリア——隣の部屋を見ながら——ハ。

アタマのこと……どうしたつす。

マリア——(心配する) 少しほのい?。  
(心配する) おまのふが枕もと隣燭し灯をつける。

病人——(心配する) おまのふが枕もと隣燭し灯をつける。

アリス——(心配する) おまのふが枕もと隣燭し灯をつける。

アリス——(心配する) おまのふが枕もと隣燭し灯をつける。

アリス——(病父の枕もとに寄りかかる) ハー。  
まだ苦い?  
アリス——エ、ハーフ目が見えないからには誰

に困ってしまったわ。でもアルゼンの叔父

さんがね。可哀想だからって、わたくしを今度

新しく町に来たが医者林の所につれてて

吴れたのよ。隣も風にカーテンがはた

とゆふ——

アリス——(病父の枕もとに寄りかかる) ハー。  
まだ、寒む。  
アリス——エ、ハーフ目が見えないからには誰

に困ってしまったわ。でもアルゼンの叔父

さんがね。可哀想だからって、わたくしを今度

新しく町に来たが医者林の所につれてて

吴れたのよ。隣も風にカーテンがはた

とゆふ——

アリス——(心配する) おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

アリス——(心配する) おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

アリス——(心配する) おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

アリス——(心配する) おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

アリス——(心配する) おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

アリス——(心配する) おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

アリス——(心配する) おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

アリス——(心配する) おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

アリス——(心配する) おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

アリス——(心配する) おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

アリス——(心配する) おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

アリス——(心配する) おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

アリス——(心配する) おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

アリス——(心配する) おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

アリス——(心配する) おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、

おまのふはもう少し、</